

京都大学	博士（人間・環境学）	氏名	渡辺 文
論文題目	オセアニア芸術のうまれるとき—アートの集合性をめぐる人類学的研究—		
(論文内容の要旨)			
本博士学位申請論文は、南太平洋のフィジー共和国における通算25ヶ月のフィールドワークに基づいて、レッド・ウェーブ・アートと呼ばれるフィジーの現代絵画が、集合的なオセアニア性への志向と個々の画家の独創性の追求との間に生じる葛藤のなかで創造される過程を、「芸術の人類学」という視座から解明したものである。 論文は短いプロローグにあたる「はじめに」を除けば全9章で構成される。 第1章では、「芸術の人類学」をめぐる先行する諸理論を検討する。そこから、①文化相対主義、②本質主義、③構築主義、④物質文化研究という4つの潮流が切り出される。①から③に至る流れは非西欧芸術というカテゴリーを認めるか否かという争点をめぐって転換を繰り返してきたが、いずれも地域の特質と社会変容の動態を捉えきれなかった、と申請者は批判する。④の系譜をひくA・ジェルの理論は記号論、エイジェンシー論、認知科学的な推論モデルを統合した独創的な試みであるが、芸術に絡みつく制度的な権力を等閑視するところに限界がある、と指摘する。これらを踏まえ、オセアニア地域の文脈に埋めこまれた芸術家の実践を民族誌的に記述することによって先行理論の限界を乗り越えることを指針に定める。 第2章では、オセアニア現代芸術の動向を概観したうえで、フィジー芸術の歴史的背景を照らしている。オセアニア諸地域で1960～70年代以降に高まった文化復興運動は、絵画を含む多様な芸術実践を生み出した。植民地期のフィジーでは大量生産された絵葉書が異国趣味を刺激する重要な媒体になった。英国から独立した1970年以降は、年に1度開催されるフィジー美術アワードが画家たちの登竜門になってきた。申請者は1980年からの優勝作品計19点を発掘し撮影に成功した。それらの殆どが「フィジーの典型的光景」を描き南島のエキゾティシズムを増幅するものであった。さらに、1991年から2011年までの20年間にフィジーで開催された美術イベントの種類と件数を分析し、2001年以降にエキシビションが増加傾向にあることを明らかにした。 第3章では、フィジーの首都スヴァにある南太平洋大学構内に1997年に設立されたオセアニア芸術文化センター（以下オセアニア・センターと略称）に焦点を当てる。まず、センターの創設者エペリ・ハウオフアの思想をその著書に依拠して描き出す。ハウオフアは、「海」（太平洋）を、孤立した島々が散在する広大無辺な空間としてではなく、開放性と繋がりメタファーとし捉えなおすことを提唱した。ついで、オセアニア・センター設立を実現させたハウオフアの奮闘を跡づけ、「センターを芸術家にとっての家にする」という理念を照らし出す。さらに、仲間の絵に手を加え、模倣を通じて技術を習得し、伝説について語りあう、といった集いの場での相互行為を記述する。 第4章では、レッド・ウェーブに関わる9名の青年たちの生活史を詳述し、芸術家として歩むことを決意するまでの道程（7人）、あるいは逆にそれを断念した経緯（2人）を描き出す。幼少年期の不幸な生育環境、慢性的な経済的苦境といった困難な条件とともに、絵を描くことが彼らにとっていかに強い衝動であるかが明らかにされる。 第5章では、ハウオフアが提唱した集合芸術の理念に立ち還り、多彩な作品群を通して反復されるモチーフを図像学的に分析し、タパ布デザイン、魚、タトゥー、渦といった共通性が「オセアニア的」な特徴を生み出していることを指摘したうえで、それらのモチーフを統合する2つの基底スタイル（グリッド・スタイルとリキッド・スタイル）			

を同定する。また、美術に素人のフィジー人49名に作品20点の画像を見せ、全員から「オセアニアらしい」という感想を得た。この顕著な一致は基底スタイルが喚起するタパ布デザインあるいは「波・水」への強い連想に基づいている、と指摘している。

第6章では、アーティストたちの市場との接合を分析する。もっとも重視されるのがコレクター市場であり、ハウオフアの許可を得てエキシビションに出品することが正統的なチャネルとなる。これに対して土産物市場、デザイン市場への進出は強く規制される。アーティストたちは各市場からの期待を敏感に読み取り、ときに自らの個性を殺して非芸術的な市場で利得を上げ、またそのことに自己嫌悪を抱くことが明らかにされる。

第7章では、2009年初めにおけるハウオフアの死が、それまで徐々に進行していたアーティストたちのオセアニア・センターからの離反を決定的なものにし、一人一人が自らの個性と独創性を追求する方向に突き進むさまが記述される。彼らが他から差異化されたスタイルを模索することの背後には「自分の作品」への強烈的な欲求があり、それがハウオフアの希求した「集合性」と決定的に背馳する可能性が浮かびあがる。

第8章では、前章で照射された葛藤を踏まえ、制作の現場で起きている人と人、人と物との相互作用が分析される。制作途上の作品と画家とのあいだに形成される親密な空間に閉じこもり、「筆が動き」「絵の具が踊る」経験に没入する一方、仲間の作品を見つめ「どのように描いた」のかを問いかけ具体的な方法をなぞることによって、作品の奥底に潜りこむ。このような行為連関の重要性を強調して次章の考察への布陣を整える。

第9章は、考察と結論に充てられる。ジェルスタイル論の軸となる「心理学的特性」の概念を援用し、スタイルの表層的な差異形成の底には心理学的特性の連続性が看取されると指摘する。この心理学的特性は、画家と画材とを含む多元的なエージェントが作用し合う場で形成され、意識を超えた行為連関を生みだす。その行為連関とスタイルの連続的なネットワークのなかにこそレッド・ウェーブ・アートの集合性が達成されている、と論じられる。最後に、オセアニアという集合性と「自分らしい絵」を追求することとの間に生じるかに見えた矛盾は、開放性と変化の可能性に富み異質なものの間に繋がりを生み出すスタイルの次元においては止揚されており、そのスタイルこそが「オセアニア芸術」の姿を体現していると結論づけられる。

(論文審査の結果の要旨)

本学位申請論文は、「民族芸術」のカテゴリーに括られるフィジーのレッド・ウェーブ・アート創作の現場に深く入りこみ、芸術の集合性・地域性のもつ意味とは何かを問いかけた、独創的な力作である。本論文の学術的な価値は多岐にわたるが、以下の5点がとくに高く評価される。

第一に、本論文は、「芸術の人類学」をめぐる先行研究の錯綜した議論を明快に整理し、①文化相対主義、②本質主義、③構築主義、④物質文化研究という4つの潮流を特徴づける論点を鮮明に浮かびあがらせた。申請者は、文化相対主義が既存の西欧的な芸術論とは異なる独自の枠組を提供したことを評価しながらも、それが「未開芸術」を超歴史的に固定化することの弊害を指摘する。また、文化を超えた普遍的な審美性を想定する本質主義的な議論の説得力に疑義を呈し、制度化されたイデオロギー的システムとしての「芸術=文化システム」を焦点化する構築主義の立場に一定の正当性を見出す。だが、こうした視点のもとでは非西欧の芸術が西欧的システムへの従属または抵抗としてのみ扱われることに異議を唱える。一方で、社会的相互作用を媒介するインデックスとして芸術作品を捉えなおすジュエルの理論に共鳴しながらも、そうした相互作用に侵入する権威と権力を彼が括弧入れしたことに疑念を表明する。これらの批判はよくバランスがとれており、非西欧芸術の制作実践を精細に観察することの必要性を納得させるに足る説得力を帯びている。

第二に、エペリ・ハウオフアというオセアニアを代表する知識人の思想の核心をくっきりと照らしだし、彼の理想主義によってオセアニア・センターという類い希な場が創設された経緯を明らかにした点は、オセアニア芸術の民族誌的研究を刺激する重要な寄与である。また、「芸術家の家」としてのセンターの空間に集うことがアーティストたちの技術習得にとって重要なチャネルになっていることを指摘したことは、実践共同体における学習メカニズムの解明に貴重な示唆を与えるものである。

第三に、植民地期からのフィジーの歴史的文脈に据えてレッド・ウェーブ・アートの特色を解明したことは、「芸術の人類学」の名に恥じない重要な達成である。植民地期に量産された絵葉書に漲る異国趣味への注目、フィジーで開催された美術イベントの20年間にわたる分析、さらにフィジー美術アワードでの優勝作品の発掘などは、高い民族誌的な価値をもっている。一方、レッド・ウェーブ・アートは、こうした歴史的背景とは対照的な前衛性に溢れている。そのモチーフを図像学的に分析し2つの基底スタイルを抽出した手法は創意工夫に満ちており、芸術作品を人類学的かつ実証的に解明するという課題に対して、ひとつの範例を提供したといえてよい。さらに美術の素人であるフィジー人の感想から得られる「オセアニアらしさ」をレッド・ウェーブの集合性の傍証とした手続きもきわめて周到である。

第四に、本論文の抜きん出た特色はミクロな民族誌記述の緻密さである。アーティストたちが経験してきた不幸な少年時代、配偶関係の破綻、経済的困窮などを申請者は共感をこめて描き出す。また、ハウオフアが希求する集合的なオセアニア性と、「自分の作品」への強烈な欲求との間で引き裂かれ苦闘する彼らの姿を活写している。同時に、父のような存在であるハウオフアへの愛情と反抗のアンビヴァレンス、剽窃疑惑から生じた仲間どうしの対立といった感情のドラマが、鋭利な筆致で捉えられている。これらの奥行きのある記述は、申請者がアーティストたちと鞏固な友情関係を築き、彼らと徹底的に行動を共にすることによってはじめて達成された。

第五に、オセアニア性への志向と独創性の追求とのあいだに生じる鋭い矛盾をいかに止揚して「民族芸術」の集合性を理解するかという点が、本研究のもっとも枢要な

課題であった。申請者は、ジェルの理論を手がかりにして、物のエイジェンシーに没入し仲間たちの作品に潜りこむ日々の実践が心理学的特性の連続性と無意識的な行為連関を生み出すと論じ、個々人によって差異化されたスタイルと行為連関とが絡み合っているネットワークこそが、オセアニア的なスタイルとして共有されると結論づける。この議論は概念のつじつま合わせのようにも見え、説得力に疑念が残るところではあるが、申請者が困難な知的格闘に挑んだ誠実な姿勢は高く評価してよい。

しかし、本論文にはいくつかの批判されるべき点が残っている。まず、申請者は、「芸術=文化システム」の権威性として西欧美術のみを仮想敵とし、日本・中国・中東などにも存在するであろう「芸術=文化システム」を不問に付している。自己の内面に生まれる表象を外化するというアーティストの営みこそがオキシデンタリズムの実践のようにも見えるが、西洋の画家たちとどこが本質的に異なるのかが、必ずしも明確ではない。また、「芸術の人類学」を理論枠とすることの代償として、本研究のフィールドに深く関連する「伝統の創出」論を無視する結果になったことに疑問が残る。つまり、知的エリートとしてのハウオフアこそが権威の中心として伝統の創出を牽引してきた可能性が十分に吟味されているとはいえない。さらに、アーティストの創作活動の背後に広がる都市的な生活条件に関する分析も不足している。農村から都市へ出て浮遊する若者たちとアーティストたちとを連続した存在として捉える視点が必要であったように思われる。最後に、構築主義が「民族芸術」の実践を権力への服従と抵抗の図式に還元することを批判する一方で、ジェルの理論が権力を括弧に入れたことを批判する申請者自身の理論的立場が、やや折衷的であるようにもみえる。

このように、本論文に残された課題は少なくないが、申請者がこの魅力的な民族誌を著書として上梓するまでに、その幾つかは乗り越えられると期待される。また、こうした問題点は、研究の野心の大きさとその独創性から不可避免的に招き寄せられたとも評価しうる。これらの瑕疵は上で評価した優れた研究成果を損なうものではなく、本論文が文化人類学のモノグラフとして高い水準を達成したことは間違いない。

以上のことから、本論文は博士（人間・環境学）の学位論文として価値あるものと認める。また、平成24年6月4日に論文内容とそれに関連した事項について口頭試問を行った結果、合格と認めた。

Webでの即日公開を希望しない場合は、以下に公表可能とする日付を記入すること。

要旨公開可能日： 年 月 日以降